ウエブページ用

令和元年度　第２回富士市総合教育会議　　会　議　録

開催日	会議場
令和元年１２月２０日　金曜日 開　会　　１３時００分 閉　会　　１４時００分	市庁舎８階　政策会議室

出席者の氏名

市　　長	小長井　義　正	教育委員	篠　原　　均
教　育　長	森　田　嘉　幸	教育委員	松　田　靖　子
教育長職務代理者	和久田　惠　子	教育委員	塩　谷　知　一

出席職員等の氏名

教育次長	畔　柳　昭　宏	青少年相談ｾﾝﾀｰ所長	増　田　良　夫
教育総務課長	高　柳　浩　正	教育総務課調整主幹	小長谷　　聡
学校教育課長	太　田　　桂	教育総務課参事補	若　林　　努
学務課長	影　島　統　子	教育総務課主幹	清　　聡　美
社会教育課長	押　見　賢　二	教育総務課指導主事	五十嵐　崇　人
中央図書館長	加　藤　豊　裕	教育総務課指導主事	太　田　堅一朗
富士市立高校事務長	味　岡　俊　雄		
教育研修・特別支援教育ｾﾝﾀｰ所長	田　中　文　博		傍聴人２名

議題（動議）及び議事の大要

（議　案）

議第３号　「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果について

ウエブページ用

開会
教育次長
　これより、第２回総合教育会議を開会する。
　開会にあたり、小長井市長からご挨拶をいただく。

市長あいさつ
市長
　こんにちは。
　教育委員の皆様方には、本日は年末の大変お忙しい中にもかかわらず、第２回目の総合教育会議にご出席いただき、感謝申し上げる。
　さて今回の議題は、「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果についてである。不登校の児童生徒数については、全国的に増加傾向となっており、生徒指導上の喫緊の課題となっている。
　本市でも、適応指導教室である「ステップスクール・ふじ」において、様々な理由により、学校に行けない、あるいは登校しにくい児童生徒に対し、専門職員が継続してかかわり、学校と連携を図りながら自立性や社会性を高めることを支援している。
　しかしながら、平成３０年度決算における市議会の事業評価の中で、「不登校の児童生徒の抱える問題が多様化し、人数も増加傾向にある中、適応指導教室に通う人数は減少しており、自立への支援が効率的に行われているとは言いがたいため改善を図るように」とのご指摘をいただいた。
　そのため、今後の適応指導教室の在り方について、どのような視点が必要になるのか、現状と課題を踏まえながら、教育委員の皆様方と活発な意見交換をしてまいりたいと考えているので、本日はよろしくお願い申し上げる。

教育次長
　本日の議題は、「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果についてである。
　これより、議事の進行は本会の主宰者である小長井市長にお願いする。

「議第３号　「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果について」

市長
　それではこれから私が進行をさせていただく。早速議事に移るのでよろしくお願いしたい。議第３号「「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果について」であるが、議会から課題等をいくつかご指摘いただいている。ステップスクールではこれまでも不登校の児童生徒に対し、様々な支援をされているので、その現状と課題について事務局から報告いただき、教育委員の皆様とステップスクールの在り方について意見を交換したいと思っている。事務局から報告をお願いする。

ウエブページ用

事務局
　「「ステップスクール・ふじ」の現状と事業評価結果について」資料に基づき説明

市長
　このあと皆さんからご質問やご意見をいただくが、その前に全国的な傾向として不登校児童生徒が増えているということだが、富士市の現状はいかがか。

事務局
　平成２６年度からの不登校児童生徒数を申し上げる。２６年度は２５５人、２７年度は２８０人、２８年度は３３０人、２９年度は３９８人、３０年度は４６３人である。

市長
　富士市議会の事業評価は、議会の評価と捉えていいのか、皆さん方も課題として認識していると捉えているのか。

事務局
　２ページ目の（８）の課題は、こちらで課題として書かせていただいた。評価に至った理由は、不登校児童生徒数が増加しているなかで、通級児童生徒数が伸び悩んでいることは課題と捉えている。今後の取り組みの中で、終了時間の延長も保護者のことを考えると、考慮しないといけないと考えている。通級しやすい環境を、今の状況を検討し、指摘と重なる部分が多いと思う。

市長
　議会の事業評価の中の、今後の方向性の「改善し継続」は、皆さんも同じ考え方であるということである。皆さんからご意見をいただきたい。

教育委員
　４番の支援体制で、７人の相談員等によりということだが、７人の相談員で何人くらい対応できるのか。限界なのかまだ大丈夫なのか。

事務局
　国の基準があり、１０人に２人の指導員と言われている。７人の相談員で、今年度は６０人が登録しているが、１日に来る人数は２０人程度である。毎日来られない子がいるので、２０人程度で推移している。７人の相談員で対応できている。去年は小学生が３人だったが、今年は１１人となり、小学生の通級が増え、２年生も来ている。
　また、発達障害がある子供では、４０分の学習でイライラしてきた場合は、別室で対応することもある。

ウエブページ用

市長
　現状で対応できているということか。１日２０人程度で、７人の相談員ではまだ余裕があるということか。

事務局
　来ている子供の対応以外に、記録を取って毎月学校へ報告する資料作りや、保護者の対応もあるので、かなり大変な面もある。

市長
　来ている人数だけではないということか。実人数に対する考え方でよいか。

教育委員
　人数は調整しないとこれからはいけないのか。先生の人数を増やさないとこれ以上増やせないということか。

事務局
　７人の相談員のうち、教員の経験がある者は５人、免許を持っている者が２人である。子供たちが増え、毎日３０人、４０人と来るようになると、対応が難しい。様子を見ていると、毎日コンスタントに来られる子供はそんなに多くない。自分でペースを作ったり、学校に行きながらという子供もいる。４０人、５０人来るということは現状では考えられない。現状では、この相談員数で対応できる。

教育委員
　減少傾向にという言葉が、実人数からやめていってしまうのか、そもそも登録していないのか。ここまでいかないという子供が増えているのか。

事務局
　学校にもここにも通えていないという子供である。

教育委員
　先ほどの不登校の数字に載るだけで、通級しない子供も多いということか。

事務局
　そうである。子供によっていろいろだが、ステップスクールに毎日通う子もいれば、仲間が集まることに対して抵抗がある子もいる。長続きしない子もいる。家から出るのも大変であったり、人混みがいやだとか、音が気になる子もいる。学校に戻れる子もいるが、その子の状況に合わせている。

市長
　中には民間の所に行く子もいるのか。

事務局
　私の所で把握しているのが、アルファ以外に、フリースクールが２か所ある。つくしとコスモスクールみらいというところである。夏の時に聞いたが、コスモスクールみらいは８月の時点で、子供が６人で、通信制高校のサポートで、中央高校に通う生徒が４人で、小中学生は２人とのことである。つくしのほうは、８月２１日現在３人が通っているということである。それ以外は把握していない。

市長
　アルファはどういう位置づけか。

事務局
　アルファは、適応支援教室という名前である。４３人が通っている。

市長
　今の説明だと、ステップスクールに通えなくなる子供もいるし、他の所にいく子もいるし、学校に通えるようになった子もいる。そういう中でこのような数字になった。全体の数字の増加傾向からすると、減少しているので十分対応できていないということが議会の指摘である。それ以外の子があまりに多い。把握ができていればよいが。

教育委員
　民間の所も減っているのか。民間が増えてステップスクールが減っているのであれば、ステップスクールに問題があるのかとも思うが、全体的に行くのがためらわれる形で減っているのか。

事務局
　みらいとつくしについて、過去のことは聞いていない。８月の時点での人数しかないので、もっと少なかったということはないと思うが。

教育委員
　不登校の理由がこちらに上がっているが、家庭における状況というのが入ってくるとすると、ステップスクールにいかない理由に入ってくると思う。このあたりもだんだん減っている理由で、この事情があると非常に難しい課題を抱えていると思う。

市長
　このあたりの分析はどうか。家庭における状況という理由があるが。

事務局
　国の方も、家庭の事情が多い。ここにその他があるが、これは調べようがない。ステップスクールでの相談の中で、外国の子、母子家庭で働いており、なかなか来れない。バスでも来れるということを説明したが、母子家庭で来れないということもあり、家庭の事情もいろいろである。

教育委員
　通級しているタイプは、ステップスクールに通っている児童のタイプか。家庭における状況があってステップスクールに通っているということで、家庭の状況でステップスクールに通えないという状況もあると思うが、家庭の事情でステップスクールに通っているというのは、どういう状況なのか。虐待などの問題もあると思うが、どういう具体例があるのか。イメージが付きにくいが。

事務局
　このタイプは、学校が作成している不登校の調査票があり、学校教育課が集計しているが、それぞれの子供のタイプが書いてあり、学校教育課を通していただいている。家庭のことについては、一つ一つはわからないが、ステップスクールに家庭の状況で通っている子供についてみてみると、家の中でのトラブルや、父母の仲が原因とか、様々な要因がある。ステップスクールに来れているので、救われていると思う。

教育委員
　ステップスクールに入るにあたっては、親が賛成してくれないが、子供が行きたいと申し出があったときに、受け付けるのか。入るときの仕組みはどうなっているか。

事務局
　基本的には学校を通じて、入級が来る。まず見学をしてもらい子供と保護者が実際の活動の様子を見てもらい、子供が第一にステップスクールに通いたいと思ったら、面談で書類を書く。子供から直接というのは、子供が一人で相談に来た。珍しいケースであるが。私がこういうことで困っているということで、そのあと親が訪ねてきた。子供の気持ちが大切だが、保護者はぜひ通わせたいと思うが、子供がそのつもりでないというケースが多い。そういう気持ちになってからということで。保護者が見て、それを子供に伝え、興味を持ったら子供を連れてくるという電話があった。

教育委員
　ステップスクールの５２人のタイプと、学校教育課のほうで平成３０年度の４６３人の不登校のタイプの比率は、結果的に同じになるのか。不登校の要因として。

事務局
　４６３人の具体的なものを持ち合わせていないが、家庭における要因と学校におけ

る人間関係のトラブル、いやなことがあったというのが多くを占めている。割合と一致するか示せず、申し訳ない。

教育委員
　４６３人の中に発達障害の場合も含めてということか。

事務局
　すべての要因を含んでいる。４６３人という数値は、年間３０日以上学校を欠席した生徒というところで、数値を出している。

事務局
　不登校に関して、文科省のほうから学校への復帰のみを求めるものではないと出ているように、昔は言葉が悪いが、自宅の部屋まで上がって子供を連れてきてという指導もあったが、今はそういうことはなかなかできない。子供が行きたくないと言えば、理由を聞いてと、学校復帰のみを目指すものではないと文科省でも出ているので、まだまだ増えていくと感じている。ここに出ている情緒障害、環境面の障害で不登校になっている子供は、ステップスクールでの支援ができる。発達障害は脳機能障害であるので医療を抱えているアルファのほうに子供たちもいる。

市長
　３０日以上の欠席は、ほとんど学校に行っているが３０日くらいになっている子は、こういうところに来ない。どういう程度の子がどのくらいいるのかはわからない。全体的には増えているが、ステップスクールの対象者になる子供は増えている。

教育長
　今、所長から説明があった発達障害がだんだん増えている。児童生徒の数が減少しているのに対して、発達障害を抱えている子の数は増えている。バランスから言って、発達障害を抱えている子の割合は増えていきます。そういう子供たちが、クラスの中での適応が難しくなっていくことで、だんだん学校から遠ざかってきてしまう。１日、２日と遠ざかり、年間３０日になると数に含まれてくる。
　もう一つは、所長から話があったが、不登校に対する対応の考え方が、学校も家庭も変わっていて、登校させるのは決して良いことではない。学校へ行きたくないという考え方があるならば、まずは子供の思いに寄り添ってあげようと、他の法律の考え方もあって、無理に登校というのは人権からも発達障害を抱えた子にもふさわしくないということもある。ステップスクールもそうしたものに対応できるような幅が必要かと思う。

市長
　これまでの皆さんの議論の中で、現状と課題の認識ができたと思う。すでに議会の方からも今後の取り組みということで、提案もある。皆さんの方で同じような認識で

あるので、今後どのようなことに取り組んでいくか、方向性があれば確認したい。

事務局
　本当は、送り迎えができれば理想だが、８時に起きる子もいれば、１１時に起きる子もいて、場所もいろいろなので、それぞれの子に合わせて車を用意するのは無理がある。議会からも改善という話があり、終了時間というか、９時半から１４時半まで通級できる時間となっているが、その時間帯をもう少し考えようと検討に入っている。もう少し早く、遅くということで、保護者が仕事に行く前に寄れたらと、どこまで対応できるかわからないが、検討していかなければならない。教育長からも話があったが、多くの子供たちが学習の幅を広げ、教科の学習だけでなく、体験学習も行っているが、子供たちが多くなった時におもしろい、もう少しやってみたいと思えることをカリキュラムに入れていく。どのくらい個に応じられるかはわからないが、可能な限りそのような取り組みをしようと検討に入っている。

市長
　その前に発言があったが、まず確認で学校復帰だけを求めるものではないという基本的な前提に立つでよろしいか。

教育長
　所長から具体的な話があったが、これからのステップスクールのあり方の基本理念を広げていきたい。これまでは教科学習を主体に置きながら、ステップはどこへのステップかと言えば学校へのということで、これまでの適応指導教室の概念の中で、何とか学校に戻してあげようという理念の中で、適応、指導、ステップという枠組みで行ってきた。これからは、学校そのものに適応できない、発達障害を抱えている子について、学校復帰を言われてしまうとハードルが高いと。教育機会確保法の中で学校に戻ることのみを目的にしない。学校教育法の中で、子供は６歳を過ぎたら小学校、１２歳を過ぎたら中学校は変わらないので、学校に行くことは目指すが、それのみを目標にしないということがうたわれている。
　これから先は、学校復帰を目指す子もいれば、学校復帰を目指さないような個性を伸ばし、才能を伸ばしていくようなそちらの方面で、学校にとらわれず、子供の個性を伸ばしていく方面で尊重しながら、学びたい、これをやってみたいという思いを大事にしながら、学びの場を作っていきたい。まずは居場所を確保し、安心して居場所を確保しながら、それぞれの子供たちの個性を伸ばしながら、尊重できるような場を基本理念として、担当課にお願いしている。時間的、内容的なものを考えているが、皆さんからご意見をいただければと思う。

教育委員
　今の教育長の話を伺って、今回のアンケート結果にあるが通級しているお子さんたちにとって、教室が自分に合っているとか、先生が自分によく声をかけてくれると、そういう意味でステップスクールの中できめ細やかな指導がされているということ

が見えてくる。友達という面ではうまくいっていないが、もともとそういうことが苦手だが学びたいということで、先生がしっかり見てくれているということで、来てくれるきっかけさえ与えてくれれば、学校に戻れる人もいれば、今までと違った形で応援してもらえるというふうなアンケート結果に見えるので、今度の方向性として専門性の高い相談員の配置などあるが、そこはある程度、人員配置もそうだが理念としては良い方にいっているのかなと思う。

子供や保護者の選択肢として、そもそもステップスクールが存在すらよくわからないとか、こんな所があったんだとか、不登校でどこに行って、何をしたらいいのかわからないという、情報発信が足りていないのではないかと。例えばどこの学校の窓口でお話しされているのかわからないが、迷っている方に、こういうところがあるから一回行ってみたらとか、アルファさんとかフリースクールの選択肢が民間も含めてあるということなので、不登校の子供がどうしたらいいのか子供目線で、こういうところがあるが無理のない範囲でいろいろみてみたらどうかと。案内、情報発信の現状を教えていただきたい。

事務局

ステップスクールについては、学校には年度当初で、校長会、教頭会に所長が行って説明をし、通級の相談をしてもらっている。伸び悩んでいる状況の中で４月の時点で、今までは校長、教頭だったが、もう少し子供たちの近くの方にということで、生徒指導主任、養護教諭の会合に出向き、校長先生から話は聞いていると思うが、ステップスクールの現状はこうであるとパンフレットを示しながら、より子供に近い先生方に、説明を行った。最近はホームページで保護者が見るのも多いので、それを見てきたとか、口伝えで聞いたので来たという方もおり、今委員さんがおっしゃるように広報の方法をさらに検討していきたい。

教育委員

先ほど送り迎えの話が出ていたが、場所の課題で、通っている中で富士川、岩松の方から来ている人と、実際にはどうか。

事務局

１２月になって、通級の方法をまとめてみたが、５６人に調べたが、車で送迎が４６人、電車は２人、徒歩は１人、家族による車か徒歩は４人、家族による車か電車は２人。富士南や岩松はなかなか難しく、来たくても来られないという子供がいると思う。須津や元吉原は岳南電車があるので、それを使って来られるという現状である。通級の手段としては保護者が、何かあったら困るのでとしているので、送っていけないというのが大きな課題となっている。こちらから迎えに行くのは無理があるので、行かない理由の一つであると思う。

教育委員

おそらくその辺がネックになっていると痛感する。９時半からとすると、送ってい

くのが無理なのでやめようということになってしまう。都内でやっているイースクールのステップスクールはどうか。インターネットの関係でわざわざ来なくても自宅で学びの環境があるということは、取り入れることは難しいか。

事務局
　すぐにはということは、現実的にはいかないが、学習をどのように行うかを検討していかないと難しいと思う。十分な情報は得ていないが、感じている。

教育委員
　学校復帰のみをということであれば、ではどこでというのも視野に入れないといけない。これからの方向性としてはいろいろな機会を与えられることを考えていかなければならないと感じる。

教育委員
　平成２６年から３０年の数の増え方というのがかなりすごいと思う。個にこたえるというのはそれなりなスキルがいるし、一対一でできるということでもないので、公平性で全員がというのも難しいことはわかる。４６３人の中で、現実的に今のステップスクールに通える子の状況がどうなのか比較しないと、この人数が増えているのに、ステップスクールの理念の中にいる子が何人かをしっかり把握したうえで、数字の差が広がっているのに来られないではないかとは一概には言えないと思う。個々の状況もあり、一年後にはステップスクールに通えるのではとか、４６３人の中に１００人はいるかもしれないとか、そういうところをこれからの時代解明されていく過渡期ではないかと思っているので、今やっているのは良いことであるので、一歩ずつ送迎ができないかもしれないが、どこの部分ならできるのかというのを課題に、何年後ならできるかとか、そういうのを一歩一歩クリアしていくことをやっていくことで、４６３人の子供が一年か何年かで来るのを待ちながら、支援者として一歩一歩行くのが、私の考えではベストではないかと、一足飛びにはいかないと感じる。

市長
　今日はステップスクールふじのテーマの中で、現状、課題、今後の取り組みについてご意見をいただいて、有意義な発言をいただいた。先ほど確認させていただいた理念的なもので、学校復帰だけでなく居場所でもいいということで、ステップスクールふじの位置づけをわかりやすく伝えていくことが必要ではないか。他にも民間に施設があるので、いくつか示しながら子供たちが一番自分の適した所に行けるような、しかもＰＲが上手に伝わっていけるように保護者に伝わっていかないといけないので、実際には届いているかわからないが。基本としてしっかりとやっていただくのが大事だと思う。
　最初にお話しいただいた時間を柔軟にということであるが、朝どれくらい早くなるかわからないが、親が仕事に出るときに出られる時間で、子供をそこにおいてもらう。帰りも仕事が終わって、ずっと一日いる子ばかりではないと思うが、それぞれの状況

に応じて柔軟に対応できるようになればいいかと思う。

教育長
　まさに市長がおっしゃるように、迎えに行くのは難しいが、送迎だけは親御さんが今よりやりやすい設定は考える必要があるかと思う。市長からお話しいただいた思いも我々も共有したい。お仕事に行く前に預けていただける時間帯、お仕事が終わったら迎えに来ていただける時間帯、そうなると幅広い時間帯ですが、対応できるようにセンターも人材、配置を工夫していただき、親御さんのニーズに応えられるようにと考えていきたい。

教育委員
　ドクターとの連携とか、児童精神科医は少なく、少数の方が大変な思いをしてやってくださっている。すぐにできるかといえばそうではないが、全国各地にはいらっしゃるので、市のほうでも全国的に募集をかけていただき、連携をとれるような形、嘱託かどうなるかわからないが、福祉と違って教育の場でも児童精神科医との連携をよりこの段階で、教育の場でしていただくことが、一つの道を開ける何かがみつかるかと、理由の中には解明できるものもあるか、全国的に少ないがお願いしたい。

事務局
　医療との連携が増えている。富士の場合では吉原林間学園に新しい診療所ができた。どんぐり診療所、中央病院、静岡のこども病院もある。１１月、１２月だけでも本センターの所員が、こども病院に５回ケース会議を開いている。向こうからの要請もある。委員さんがおっしゃったように、数は少ない。巡回相談員も不登校の生徒に関わることがある。昨年度は６３４人、不登校ばかりではないがお子さんと保護者にかかわってきた。こちらからステップスクールを紹介して通う子もいれば、青少年教育センターから相談を受けて、医療につなげるということもしている。医師が少ないのが現実である。

市長
　今日は皆さん方から貴重なご意見をいただいた。今後のステップスクールふじの改善・改革に向けて参考にしていただきたい。それでは、事務局に進行をお返しする。

教育次長
　以上をもって本年度第２回目の総合教育会議を終了する。

　「閉会」